

伊達市噴火湾文化研究所 ・ 東北大学東北アジア研究センター

地域を見つめる多様な視点

「清代モンゴルの世界」と「有珠山噴火の活動予測」



岡 洋樹

(東北大学東北アジア研究センター長)

【略歴】 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程退学。早稲田大学助手、日本学術振興会特別研究員(PD)、群馬大学非常勤講師、早稲田大学非常勤講師、東北大学東北アジア研究センター助教授、准教授を経て、現在同教授、センター長

【業績】 『清代モンゴル盟旗制度の研究』(東方書店、2007年)、『朝倉世界地理講座 大地と人間の物語2 東北アジア』(境田清隆・佐々木史郎と共編)(朝倉書店、2009年)、『歴史の再定義 旧ソ連圏アジア諸国における歴史認識と学術・教育』(東北大学東北アジア研究センター、2011年)など。

【講演】 「東北アジアの中の遊牧民

—清代モンゴル人の日常世界—

【要旨】 東北アジアの内陸部のステップ草原地帯は、古くから遊牧民の住む世界でした。彼らは、南方の農耕文明と交流・対抗する中で、世界史にも大きな役割を果たしてきたのです。チンギス・ハーンが建国したモンゴル国も、そのような遊牧民が築いた帝国のひとつでした。帝国が崩壊した後、モンゴル人は故郷のモンゴル高原に戻り、17世紀には中国の清の支配下に入ります。その頃から、モンゴルは世界から忘れ去られていきました。しかし彼らは、異国の支配の下でもたくましく生きていたのです。

この講演では、清の時代のモンゴル語史料を用いて、この時代のモンゴル人の生活を描き出しながら、当時の遊牧民の日常世界を考えてみたいと思います。



後藤 章夫

(東北大学東北アジア研究センター)

【略歴】 北海道大学大学院理学研究科博士後期課程地球物理学専攻修了、公益財団法人地震予知総合研究振興会研究員、東北大学東北アジア研究センター助手を経て現在同助教

【業績】 「低温での粘性増加に対する熱履歴の影響」(北海道大学地球物理学研究報告、2004年)、「放熱率測定に基づいた有珠2000年噴火の活動推移長期予測」(北海道大学地球物理学研究報告、2007年)、「無人火山探査車MOVEの開発とその運用課題」(日本惑星科学会誌、2012年)など。

【講演】 「放熱率測定に基づいた

有珠2000年噴火の活動推移の長期予測」

【要旨】 有珠山は、2000年3月31日に、有史以来7度目となる噴火活動を開始しました。この活動に際しては、3月29日夜に周辺1市2町の住民に避難指示が出され、事実上噴火予知に成功したといえます。またその後は、住民生活への影響を考慮し、噴火開始2週間後という早い時期から、活動状況をにらみつつ安全とみられる地域から段階的に避難指示が解除されました。このように有珠2000年噴火では、火山防災上画期的と言える対応が観測データに基づきいくつもなされました。

しかしながら、その後の活動推移の予測は必ずしも成功したとは言えず、当初は爆発的噴火の発生が懸念されるなど、いつ収束するかの見通しを立てるのが困難でした。このような中、私たちのグループは現地での観測を通じ、今回の噴火は比較的早期に収束すると予想しました。結果的にこの噴火活動は102日で終息宣言が出され、1977年からの活動が4年8ヶ月続いたのに比べてきわめて短く、私たちの予想は的中しました。

今回、私たちがどのような理由で早期の活動終息を予想したかを講演で解説します。

